W-2-5

ワークショップ：最後のアナログ言語調査資料：危機に瀕した言語データの発掘と救出

湯川データ：120 を超えるバントゥ諸語の並行的データ

米田信子（大阪大学）

1. バントゥ諸語

バントゥ諸語は、ニジェール・コンゴ大語族に属するアフリカ最大の言語群であり、その数は 500～600 言語と言われている（小森・米田 2014）。日本のバントゥ諸語研究のパイオニアのひとりである湯川恭敏教授（1941-2014）は、約 30 年の間にそのうちの 131 言語の調査を行った（図 1 参照）。

バントゥ諸語の「祖語」は、西アフリカに位置する現在のカメルーンの西部（図 1 左上端あたり）で話されていたと考えられている(Bostoen 2018:579)。約 5000 年前にそこから話者が移動を始め、現在ではアフリカ大陸の赤道以南（カメルーン南部からケニアにかけてのライン以南）の全域に広く分布する。バントゥ諸語はこれだけ広大な地域に分布しているにもかかわらず類似性が高いと言われている。「名詞クラス」と「動詞の膠着的構造」という 2 大特徴を顕著にもつことで知られ、アフリカ諸語の中では最も多くの研究がなされている語群である。

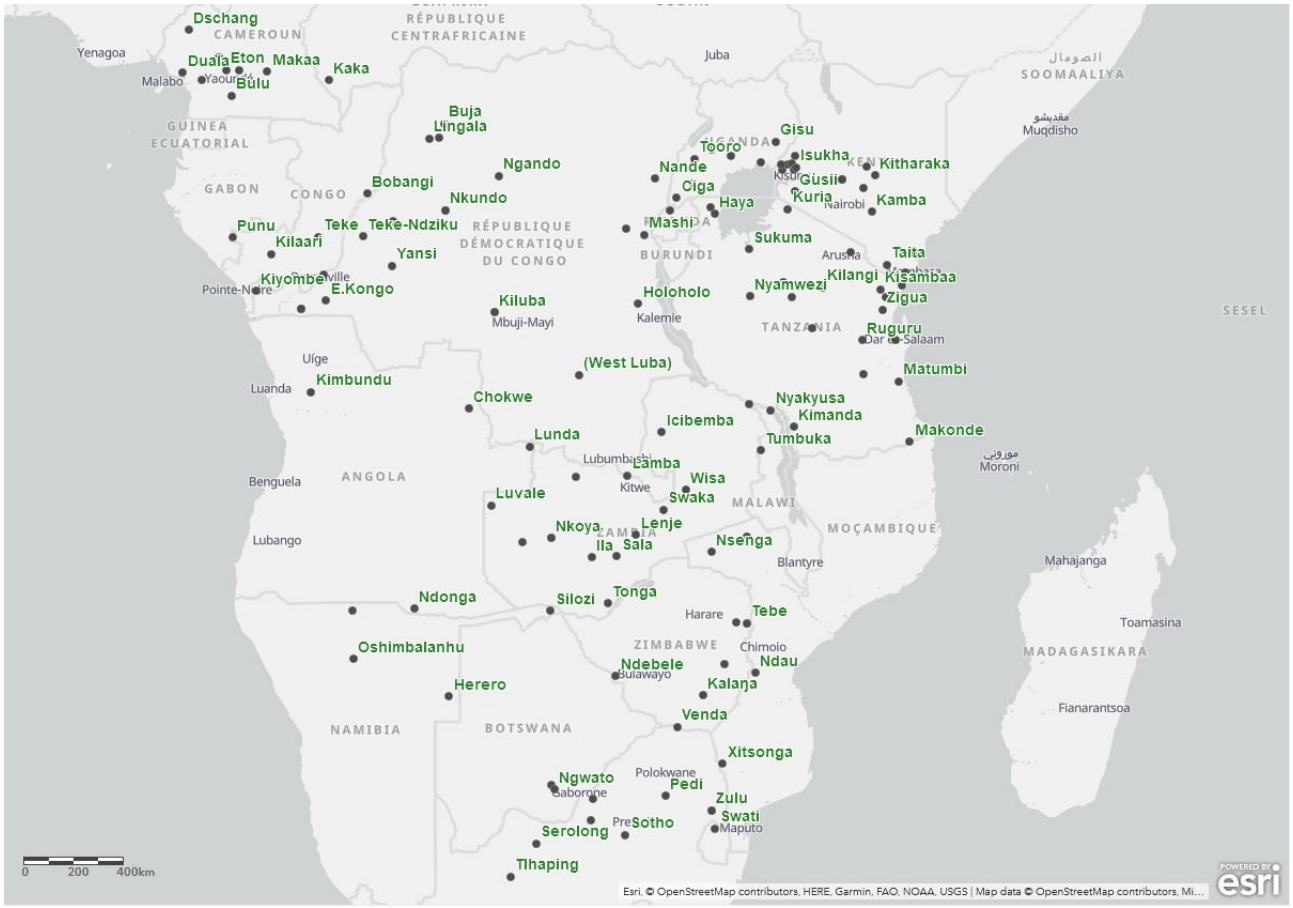

図 1: 湯川恭敏教授が調査を行ったバントゥ諸語の分布

2. 湯川の調査とデータ

湯川の興味の中心はアクセント（声調）であった（例えば、湯川 1995 など）。特に動詞のアクセント体系に関する研究は、世界に目を向けても湯川の右に出る研究者はいない。言語調査には、ひとつの言語についてあらゆる現象を徹底的に調べるタイプの調査と、特定の現象についてできるだけ多くの言語を調べるタイプの調査があるが、湯川の調査は典型的な後者である。しかしながら、アクセントの調査を始める前にまず語彙調査と文法調査を行い、その言語の輪郭をしっかり捉えるというのが湯川の調査の特徴であった。もっぱらバントゥ諸語のアクセント体系の研究をしていたが、「まずその言語の輪郭を捉える」という点で、その言語を理解することなく特定の現象のみを取り出そうとする研究とは一線を画している。

語彙調査と文法調査に用いた調査票は、自身による「バントゥ諸語語彙調査票試案」（湯川 1979）と「バントゥ諸語文法調査票試案」（湯川 1977）である。語彙調査票は以下のように分類された 2359 項目からなる。

I. **人体** :1.頭部 2.胴体 3.上肢 4.下肢 5.体内 6.生理 7.感覚
II. **病気と怪我**：8.病気 9.精神疾患 10.怪我 11.皮膚疾患 12.症状 13.身体障害 14.治療
III. **身支度**：15.衣類 16.裁縫 17.身づくろい 18.装身具
IV. **食生活**：19.食物 20.料理 21.食器 22 食事 23.食物の状態
V. **住居**：24.家 25.家具 26.掃除,
VI. **親族**：27.家族 28.結婚 29.出産育児
VII. **人間**：30.人間 31.死
VIII. **動物**：32.家畜 33.野生動物 34.狩猟 35.爬虫類 36.小動物 37.魚 38.鳥 39.虫
IX. **植物**：40.植物 41.植物の部分 42.植物の一生 43.耕作と収穫
X. **身体の動作**：44.睡眠 45.からだの動作 46.移動
XI. **日常生活**：47.労働 48.火 49.水
XII. **社会生活**：50.ことば 51.遊び 52.けんか 53.授受 54.社会 55.政治 56.戦争
XIII. **精神生活**：57.感情 58.精神活動 59.数量・計算 60.超自然
XIV. **対物動作**：61.物の移動・運動 62.統合・分離 63.変形 64.破壊 65.その他の対物動作
XV. **物体**：66.物体の部分 67.物体との関係 68.色と形
XVI. **天然現象**：69.天然現象 70.光と音
XVII. **地勢**：71.地形 72.河川 73.地面・鉱物
XVIII. **時間**：74.時間
XIX. **性質**：75.性質
XX. **一般動作**：76.開始終了 77.一般動作 78.派生動詞
XXI. **一般事物**：79.一般事物
XXII. **その他**：80.代名詞等 81.疑問詞 82.副詞等 83.あいさつ等

文法調査票は、バントゥ諸語の特徴である名詞クラスや動詞構造に加えて、テンス・アスペクト体系や複文まで文法スケッチに必要な項目を広く扱っている。湯川は、調査した 131 言語のうち約 120 言語に

ついて、これらの調査票に沿ったデータ、すなわち 2359 項目の語彙と文法スケッチに必要なデータを収集している。これはひとりの研究者が調査したバントゥ諸語の数としては驚異的な数である。

30 年にわたる湯川の調査資料は、51 冊のマニュスクリプト、約 260 冊のノート、124 冊の語彙リスト、1045 本のテープにおよぶ。現在これらは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センターのプロジェクトによってデジタル化されている（詳細は以下の URL を参照のこと）。

- 湯川恭敏教授によるバントゥ諸語記述調査資料目録
  https://online-resources.aa-ken.jp/resources/detail/IOR000185
- The list of Prof. Yukawa's field linguistic data on Bantu languages
  和文：https://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178
  英文：https://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=199

3. 湯川データの意義

湯川 (2011) は、語彙調査票の中から基礎語彙 200 項目について言語ごとにリストアップし、それらの比較からバントゥ諸語間の遠近関係を判定し、バントゥ諸語の分岐の歴史に関する仮説を提示した。同様の研究はこれまでもヨーロッパを中心に行われてきたが、いずれも比較に用いられているのは言語ごとに異なる研究者が収集したデータであり、同じ研究者（あるいは手法）によって収集されたデータを用いた比較研究はない。一方、湯川のデータは、ひとりの研究者によって同じ調査票を用いて同じ手法で収集されたものであり、120 以上の言語について同じ項目の語彙や例文が同じ順番に並んでいる。これだけ多数の言語の並行的データが持つ学術的価値は極めて大きい。とりわけ、データが少ないアフリカ諸語研究においてその価値は計り知れない。

これら湯川のデータのうち、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から出版された Bantu Vocaburaly Series 全 15 巻で発表されているものはすでに海外でも広く引用されている。しかしそれ以外の論文や書籍で発表されたデータは海外の研究者にはアクセスが難しく、湯川のデータのデジタル化は海外のバントゥ諸語研究者からも切望されてきた。デジタル化された湯川のデータが、今後のバントゥ諸語研究、ひいてはアフリカ諸語研究に多大な貢献をもたらすことは疑う余地もない。

参考文献

小森淳子・米田信子．2014.「総説－言語・言語学」日本アフリカ学会編『アフリカ学事典』京都：昭和堂．pp. 96–107.

湯川恭敏．1977.「バントゥ諸語文法調査票試案」『アジア・アフリカ文法研究』6: 211-218.

湯川恭敏．1979.「バントゥ諸語語彙調査票試案」『アジア・アフリカ言語文化研究』17: 139-212.

湯川恭敏．1995.『バントゥ諸語動詞アクセントの研究』東京：ひつじ書房.

湯川恭敏．2011.『バントゥ諸語分岐史の研究』東京：ひつじ書房.

Bostoen, Koen. 2018. TheBantu expansion. Thomas Spear (ed.) *The Oxford Encyclopedia of African Historiography: Methods and Sources* Vol 1. Oxford University Press.